

出土品図版解説

- 図版 1 口縁内径16.5 匁、外径21 匁、高さ12.5 匁、底形10 匁の浅鉢形完形品である。全体赤褐色で、縄文はなく、胴部に渦巻文様の隆起線があり、側面に細い突差文が点々とある。口縁は外形丸みを持っている。
- 2 図版1の出土状況
- 3 加曾利E式Iに属し、縄文はなく、半截竹管文により、渦巻文が頸部以外に施してある。口縁部に4個の突起をもち、器体は一様に赤味の強い、褐色である。口径29 匁、高さ20 匁、底形16 匁、底部は欠損している。焼成は悪くない。
- 4 3の出土状況
- 5 炉址に使用されたもので、口縁部と底部を欠く。現存する上部は文様がなく、頸部に2本の隆起文が水平に引かれて、あらい縄文が垂直に施してある。なお、胴部に隆起文数本たてに施してある。上部は25 匁あり、焼けている。高さ16 匁、底形17 匁、厚さ0.9 匁、全体灰黄色で保存は悪い。
- 6 口部を欠く。極小形土器である。加曾利E式のIに属し、上部は黒色が強く、底部は赤色が強い。胴部に地文がなく、張付文様があって、その上に突差し文がある。頸部に紐状の極粗雑な施文がある。口径9 匁、高さ15 匁、底形6.5 匁で焼成は良い。
- 7 加曾利E式Iの末期に近い土器であろう。頸部に2本の隆起縄文が水平にあり、その上は無文で丸味がある。胴部には竹べらによる粗末な細い線が、底部近く迄ある。焼成も良く全体灰黄色で厚さ0.8 匁ある。
- 8 赤色の強い生地に黒色をまぶした円筒形土器で底部は欠損している。口縁部は無文で頸部に細い隆起線があり、その上に小さい爪形文があり、胴部に同様な文様がある。胴部の地文は竹べらによる粗雑な線が引かれている。高さ22 匁、上径13 匁、厚さ1 匁、下部9 匁ある。
- 9 加曾利E式Iに属し、円筒形で黒味を含む赤褐色で頸部に紐状の太い線の上を指で、次々に押した文様があって、口縁は無文となるも、他は竹へらによる細い直線がある。上径は約16 匁、高さ25 匁、7.5 匁、厚さ1 匁で、保存は悪い。
- 10 径37 匁あるらしい大形土器の半分で、加曾利E式のIの典型的な土器で、太い隆起線文が唐草文様に施され、四カ所に浮刻の把手もあり、器体全部に単粒子の施文がある。高さは18 匁で、頸部以下はない。全体灰黒色で、厚さ1.5 匁ある。焼成は良い。

図版 11 図版 10 の出土状況

- 12 口縁部は非常に厚く 2 ㎝を数えるも、胴部は 1.1 ㎝で、浅鉢形である。外部はところどころに赤味がある灰黄色で、口縁部に 2 酸化鉄によると考えられる塗料が残っている。炉址の真上にあった。口径 46 ㎝、深さ 25 ㎝ある。
- 14 加曾利 E 式の薄いものといえる土器の破片で、太い隆起線が使われている外は、土器全体を太い左傾縄文で満している。厚さ 13 ㎝、焼成は良い。灰黄色である。GN-78 出土
- 15 GN-68 出土 加曾利 E 式の II に移行する直前の土器で、焼成は、比較的良い。大形土器の破片で、口縁部には II 特有の渦巻文があるも、半截竹管文による施文の間を左傾縄文で満している。厚さ 1 ㎝で焼成は良い。
- 16 GN-67 出土 胴部以下は欠損の破片である。口縁部に半截竹管による突差し文があって、同一用具で器体に垂直の線が引いてある。厚さ 1 ㎝で焼成は良いが加曾利 E 式 I に属する土器である。
- 17 加曾利 E 式 III に属する。全体黄褐色で、太い隆起線があって、その間を矢羽根状に沈線が施してある。
- 18 加曾利 E 式 III に属し、焼成は悪く、胴部以下のものである。上部の径 26 ㎝、高さ 20 ㎝、底形 6 ㎝ある。全体灰赤色で垂直の磨消文があり、その左右は竹べらによる沈線がある。
GN-87 出土
- 19 ~ 31 加曾利 E 式土器片拓影
- 32 ~ 33 出土した土器片
- 34 ~ 44 出土した石器 短冊型石器
- 45 " 撥型石器
- 46 " ふんどう型
- 47 ~ 48 " 各種型の石器
- 49 " 磨製石器
- 50 " 黒よう石

